
東方獄炎伝

紅眼の琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方獄炎伝

【Nコード】

N3428L

【作者名】

紅眼の琥珀

【あらすじ】

森の中倒れているオレ

「じいじはドロなのだ…」

オレは生きているのか？

それとも死んでいるのか？

わからない…しかもオレに何が起こったのか…

最後に言えることが一つ

『オレはいつたい誰なんだ？』

そしてオレは意識がなくなった

作品説明

それはとある日のことだった…オレは見知らぬ森で倒れている…そして…

作者

「ヒヤッホー！！幽々子はお…」

龍星

「うざい、てなわけでg d g d好きな作者逝ってよし」

作者

「ちょwwwおまwwwアツー！！」

この物語は突然記憶を無くした主人公が幻想入りするお話です。

そしてg d g d要素が多量含まれております

その事をご理解したうえで読んでいただいたら幸いです

…こうして一人の青年は幻想入りしていった

作者

「そして幽々子は俺の…」

龍星

「自重しろ」

とある屋敷…の隣の小屋にて…

屋根がある…

オレは目が覚めた

オレは生きていた。少し嬉しかった

だがなぜかオレは誰かの布団に寝かされている

此処はどこだと辺りを見回す

すると左側の窓の方から

???

「フンッ！フンッ！」

と力強い女の声がした

オレは誰かにしてもらったかわからないが体中に包帯が巻かれており布団から起きあがろうとした

だが起きあがろうとするたびに胸や体中に激痛が走り込んだ

オレは痛みを堪えながら左側の窓の傍まで行った

するとオレに気づいたのか外で素振りをしていた少女がオレの方向を向き

???

「もう大丈夫なの？」

と問いかけた

それに対してオレは

「まあ大丈夫だ…と…お…も…」

バタリ…

またオレは倒れてしまった???

「大丈夫!!」

と素振りしていた少女はオレの所へ走っていった。

↳数時間後↳

「うっ、うん」

???

「目覚めた?」

と茶をすする少女

そしてオレは傷ついた体で起きあがろうとしたが体中にまだ激痛が走っていた

???

「ちょっと、あまり無茶しないで。貴方は体中に傷がついているよ。」

しかも腹にはでかい穴があったし…」

腹にでかい穴？そんなのあったのか？と呟くオレ

??

「まあでも永琳さんがつくった薬だからな一日くらいで全快するでしょう」

『永琳』？誰だそいつはと心の中でつつこむオレ

??

「まあ私がいなければ貴方死んでいたよ」

オレはこの少女の言っている意味が分からなかった

この少女のくだらない話を聞いていたら体中の痛みも和らぎなんとか体を起こせるようにはなってきた。

そしてオレは少女に

「一つ聞いてもいいか？」

と言ってみた。

すると少女は

???

「ん？何？」

と返答してきたのでオレは

「いったい此処は何処なんだ？」

と質問を試してみた

すると少女は

???

「此処何処って…幻想郷よ。あんた知らないの？」

「ああ知らない」

???

「まさかあんたって… 外来人？」

「それもわからない」

???

「もしかして… 記憶喪失？」

「多分そうかもしれない…」

???

「… はあ… まさかの記憶喪失とはねー… 名前は？」

「それも知らない」

???

「あちゃー、こりゃ重度の記憶喪失だね。ならいいや、私は島崎綾音。綾音でいいよ」

少女の名前は綾音だそうだ。容姿は15〜6歳のような少女だった
一通り綾音から話を聞き終えた

状況を説明するとオレは此処白玉楼という屋敷から数十キロ離れていた森で倒れていたのを綾音が見つけたそのままここまでできたのである

すると次は綾音から

綾音

「じゃあ私からも聞きたいことがある」

と問いかけた

「なんだ？」

とオレは問い返す

綾音

「あなたの能力ってなに？」

と聞いてきたのでオレは

「能力？　いったい何のことだ？」

と綾音に言い返す

すると綾音は突然歌い出した

その歌声はオレの傷みを忘れるほどの優しい歌でとても気持ちが悪くなってきた

すると綾音の口から何か音符のようなものが見えてきた。それが段々と具現化され、音符のようなものが大きくなっていき、音符のよくなものは綾音の前に落ちてきた

すると綾音が歌をやめオレにこう言った

綾音

「これが私の能力

『音を具現化する程度の能力』
わかった？」

と言った

オレはなんとなく理解した

すると右側の窓の方から

???

「おい！綾音さん居らっしやいますか？」

と女の声がした。

すると綾音は右側の窓の方へ行き

綾音

「居るよ？どうしたの？妖夢？」

と返事をした

右側の窓の外に居る少女は妖夢と言っていた

すると妖夢は

妖夢

「綾音さん、気絶していた人大丈夫でしたか？」

綾音

「大丈夫だよ！妖夢もこっちに来て」

と綾音は妖夢を小屋まで来るように言った

そして妖夢はオレと綾音が居る小屋に来て自己紹介をした

妖夢

「私は此処白玉楼の庭師である魂魄 妖夢と言います。どうぞよろしくお願いします。」

と深々と頭を下げた

妖夢は容姿的に10〜11歳位の女の子であった

オレも妖夢に自己紹介をしようと思ったがオレには名前がない。焦ったオレに綾音は急いで妖夢に

綾音

「こいつは記憶喪失だから名前が無いんだ。だから私たちで考えよう」

と妖夢に耳打ちをした〜少女達思考中〜

綾音

「うんなかなか決まらないねえ」

妖夢

「そうですねえ」

とため息を吐く二人

とオレは二人が考えているのをすっぱかして外へ出て行った

「ここが幻想郷…なんか懐かしい感じがする…」

と綾音の小屋あたりを見回したら右側に大きな屋敷が建っていた

妖夢が言っていた白玉楼で言うのはこれの事だろうとオレは思った

そして白玉楼の庭あたりに着物を着た大人びた女性が何か唄を歌っていた…よく聞こえなかったがな

オレはその人の所まで歩いていった

激痛も綾音の歌声や『永琳』とか言う奴の薬のおかげで完全に治まった

そしてオレは着物を着た大人びた女性の所まで着き

「すみません。ここは何処ですか？」

と綾音と同じ質問を試してみた

すると着物を着た大人びた女性は唄をやめ

???

「此処は幻想郷よ」

やっぱりこの女性も綾音と同じ答えを出した

だが女性はオレを心配していたのか

???

「貴方大丈夫なの？綾音に聞いたのだけれど凄く傷を負ったのでしよ…」

と心配してくれた

??

「で貴方の名前は何？」

と女性は問いかけた

だがオレには名前がない…返答するのに少し固まった

と頭からなぜか『炎龍』という言葉が浮かんだ

そしてオレは彼女に

「俺…ホムラリユウセイ 焰 龍星です」

と問い返した??

「焰 龍星…なんか変な名前ね」

と彼女はクスクスと笑った

???

「私はここ白玉楼の家主で霊界の管理人 西行時 幽々子よ。宜しくね、炎龍」

と彼女はこう言った

龍星

「あつ、よろしく願いします」

とオレは幽々子さんに深々と頭を下げた

すると綾音の小屋から二人が出てきた

綾音& amp ;妖夢

「名前できたよー!」

と二人はオレに向かって叫んだ

龍星

「お疲れさん!二人共。でも名前決まったからいいよ」

とオレは二人に言い返した

すると幽々子さんは

幽々子

「何？名前が決まったって？」

とハテナマークがたくさんついていた

オレは幽々子さんに

龍星

「あつ、言っておくの忘れてましたが俺記憶喪失なんです。だから本当の名前は知らないからあの二人に俺の新しい名前を考えて貰っていたんです」

と言った

幽々子さんはそれに応じて

幽々子

「それは可哀想ね…で焔 龍星は貴方の新しい名前？」

と言ってきたのでオレは

龍星

「まあそうですかね…」

と返答した綾音

「な〜に幽々子さんと呑気に喋っているわけ？」

龍星

「あ…綾音、名前作りご苦労さん」

綾音

「な〜にがご苦労さんよ！せっかく私たちがあんたのために名前決めていたのに…ほんとムカつくわ」

龍星

「そう怒るなよ、妖夢もなんか言ってくれよ」

妖夢

「私もです。せっかく貴方のために名前を決めていたのに…まさか自分で決めたなんて骨折り損のくたびれ儲けですよ」

龍星

「そう怒らないでよ二人とも」

となだめるオレ。すると幽々子さんが

幽々子

「そうよ！二人ともあなたたちが炎龍のために名前を決めてくれるのは炎龍もうれしいわよ。だからといって名前が決まったからってそう怒るのはおかしいのじゃない？二人とも？」

と幽々子さんは二人を叱った

そして二人とも黙り始めた

そしてオレは口を開き

龍星

「二人とも、俺のために名前を決めてくれてありがとう」

と二人に頭を下げた

そして二人は

綾音& a m p・妖夢

「「どういたしまして」「

と二人の息があうように同時に返した

そして俺は二人に

龍星

「でお前らが決めた名前って何だ？」

と言った

すると綾音が手に持っていた紙をオレに差し出した

『露璃 混蛇紹烏』
ロリコンタロウ

龍星

「…却下！だ」

とオレは綾音が差し出した紙をバラバラに引き裂いた。

綾音

「ちょー！！なにしてんの龍星！！私と妖夢で決めた名前なのに」

龍星

「何だよ露璃混蛇紹烏てなんだ！俺がロリコンですよみたいな感じじゃねえかよ！」

綾音

「えっ、あんたロリコンじゃないの？」

龍星

「俺はロリコンじゃねえ！！お前どこで俺の基準はかってるんだよ」

綾音

「え？見た目で」

龍星

「見た目って…おい！！」

と変なやりとりが数分間続いた幽々子

「まあ二人とも落ち着きなさい」

とオレと綾音は幽々子さんに止められた

龍星& amp ;綾音

「すみません」

と二人で謝った

ふと思ったがオレは何歳なのだろう?と疑問に感じた

そしてオレは三人に

龍星

「なあ三人とも、俺いくつに見える?」

と質問してみた

すると綾音は

綾音

「18〜9歳位じゃないの?」

と言い、妖夢は

妖夢

「私は20〜23位だと思いますよ」

そして幽々子さんも

幽々子

「私も20〜23位じゃない?」

と返事が返ってきた

要するにオレは大体20歳だろうと考えた

と幽々子さんは

幽々子

「ちよっと話は変わるけど貴方スペルカードを知っている?」

龍星

「スペルカード？何ですかそれ？」

とオレは幽々子さんに問い返す

すると綾香は

綾音

「ちょっと待って、私が出すから幽々子さんは出さないで」

幽々子

「は〜い、わかったわ。ならば宜しく〜私はまだ使っていない白紙のスペルカード探しておくから。妖夢も手伝って〜」

妖夢

「わかりました幽々子様」

と二人は白玉楼の中に戻っていった綾音

「じゃあスペルカードの説明をするよ。えーっと…新しい名前って何だったっけ??」

龍星

「焰龍星。 龍星でいいぞ」

綾音

「じゃあ龍星、今から私のスペルカード出すからちよっと離れたい
て」

と言われオレは綾音から少し離れた

そして綾音はポケットからカードをだし

綾音

「斬音符『鎌鼬』ソニックブーム』」

と叫んだ

するといきなり上空から鎌の状態となっている弾幕が見えた。しかし、凄
い音がする

綾音

「これがスペルカード。今使ったのは私のスペルカード『鎌鼬』ソ
ニックブーム』、他にもまだ沢山あるけどあんたにはこれだけで
いいっしょ」

龍星

「えっ、今なんて言った？」

綾音

「だからこれが私のスペルカード、わかった？」

龍星

「なんとなくわかった。でそれは何のために使うのか？」

綾音

「それは弾幕ごっこに使うためよ」

弾幕ごっこ？なんだそれはと首を傾げるオレ。すると白玉楼から

幽々子

「炎龍く白紙のスペカ見つかったわよ」

と幽々子さんの声がした

龍星

「ありがとうございます」

とオレは幽々子さんに深々と頭を下げた

龍星

「で作るにはどうすればいいんですか？」

とオレは幽々子さんに質問をする

すると幽々子さんは

幽々子

「白紙のスペルカードを手に持って頭の中で自分の技を考えるだけ。ただそれだけの事よ」

と言った

幽々子

「でもあなたにはまだ弾幕ごっこには出来そうもないからゆっくりと考えておきなさい。私は中に戻るから」

と最後に幽々子さんはそう言って白玉楼の中へ消えていった

とある屋敷…の隣の小屋にて…（後書き）

綾音

「さうして私も戻ろう」と

と綾音も自分の小屋へと帰った

しかし、オレはどこに居ればいいんだ！…とふと思った

そして俺は綾音に

龍星

「綾音！すまんが泊めさせてくれんか！」

綾音

「え、あんたが居たら余計狭くなる、だけど条件付きならいいよ」

龍星

「わかった、で条件てなんだ？」

綾音

「それはねー…最近私の家に夜中空き巣がくるのよ。しかもそいつ

逃げ足が早いから捕まえられないの。だから龍星!! 今日捕まえるからあんたは家の見回りをしなさい。わかった?」

龍星

「ああわかった。ならそいつを捕まえれば泊めてくれるんだな?」

綾音

「もち!」

とって綾音は小屋に戻っていった

能力覚醒

オレは空き巣をとっつかまえる為に見張り役とされていた。

龍星

「うう〜さびい！」

綾音

「ねえ龍星、空き巣の奴来てる??」

龍星

「さあな。つーかそいつの特徴は何だ??」

綾音

「そいつはね〜…うーん…そいつは金髪でいつも魔女の帽子をかぶって箒でいつも私の家から何か一つ盗んでいく奴」

龍星

「まあ簡潔に言つとそいつは金髪でいつも魔女みたいな格好をして箒で移動してる奴だな。」

綾音

「その通り!!じゃあ私は寝るから龍星!後はよろしく!」

龍星

「はいはい。じゃあお休み」

と綾音は寝てしまった。

綾音が寝て数時間が過ぎた。時間は五三つ時（今で言う午前二時にあたる。）であった。

…しかし綾音が言う泥棒がくる気配がない。外は一向に寒くなるばかりだ。

龍星

「フェークシヨイ！！うう～さびい～しかしまだこね～な泥棒さんは」

と独り言を言うオレ。すると西側から箒で飛んでいる少女が綾音の小屋に飛んでくるのが見えた。

龍星

「ん？あいつが綾音が言う泥棒だな？さ～て一準備しとくか。」

と言って箒に乗っている少女を待ちかまえていた。

???

「いやっふゝ さゝてまた綾音の家から何かかりていゝゝと」

龍星

「ちよつと待て!..!」

???

「ん?誰あんた?」

龍星

「俺か?俺は焰 龍星。一応こいつ(綾音)の居候人だ。でお前の名前は何だ??」

???

「あたし?あたしは霧雨 魔理沙。普通の魔法使いだZE」

龍星

「でその魔法使いさんがなぜ此処にいるんだ?」

魔理沙

「それは綾音の家から何かを借りに来たからだZE」

やっぱりこいつか…とおもったオレ。

龍星

「そう言うことか…お前がいつも綾音の家から何か盗んでいるのか…」

魔理沙

「そつだぜ」

龍星

「なら話は早い、一応綾音の命令でなお前を捕まえないと俺は中に入れないんだ。だから捕まってくれ。」

と魔理沙にたのんだオレ。しかし魔理沙は

魔理沙

「イヤダＺＥ」

とあっさり断られた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3428/>

東方獄炎伝

2011年1月26日02時42分発行